

伝道者はなぜ正義と平和の問題に関わるのか。

ブレンダン・ラヴェット SSC 著

現在の伝道者が使っている言葉で、50年前はなかったものがある。われわれの雑誌やウェブサイトでは正義、平和、創造の完全性の問題に強調点が置かれ、第三世界債務、水問題、生命体特許、グローバリゼーション等に注意が向けられているのにお気付きになるだろう。このような言葉使いと強調点の変化には、気づかないままに神学的展望が失われていることが表れているのではないかと考える人々がいる。伝道の役割の説明方法を発展させるべく携わる私が述べておきたいのは、これはただ信仰そのものに内在する、現在進行中の、自己修正的な学びのプロセスの問題であるということだ。

[キャプション]

マカティの眺望 マニラの商業中心地区

三輪自転車の運転手が休憩を取っている。マニラ周辺で乗客を運び、一日10時間労働で約100ペソ（1.27ユーロセント）の稼ぎとなる。

われわれの役割は十字架にかけられたキリストを宣教することである。キリストは当時のイスラエル民族を抑圧していた宗教界と社会の権力にまさに対峙したがゆえに磔刑に処せられたことを心に留めなければならない。その死から二千年を経てもほとんど変化はない。貧者、最も持たない者たちは依然として抑圧されている。十字架のキリストを宣教するのにその抑圧を無視はできない。でなければその抑圧者と結託していることになる。

われわれはすべてこの世の罪に関与している。教会の近代の布教を振り返ると残念に思うことが多い。16世紀初頭以降、宣教師たちは植民地化勢力とともに移動することが強調された。シンボルで言うなら十字架と剣がそれぞれあまりによく一致した。たとえば南北アメリカ大陸の征服では、宣教師たちはスペインとポルトガルの征服者たちと一緒に行動した。キリストを全く知らなかった何百万もの土着の人々に出会い、侵略され征服された結果こうした不運な人々がどれほど多く苦しまねばならないか発見した。恐ろしい暴力が行われた話がドミニコ会士たちによって[スペイン・]サラマンカの同胞に伝えられると、深い神学的議論が開始された。キリスト者たちによるそれほどひどい残虐があるのに、キリストを拒否することについてどうして人々を責め立てられるのか。ただ福音を告知することは可能だったのか。どうすれば説得力をもって福音を宣べ伝えられるのか。

そうした議論を通して、キリストの死と復活の物語を受け止めてほしいと伝道者に思われた人々は、次第に十字架にかけられたキリストであるとみなされ始めた。そしてキリストの方が彼らを十字架にかけ側の人たちとみなされ始めた。それはただ、真の福音宣教するため何が必要になるかを学び始める、数多くの契機の中の最初のものである。ヨハネ23世がユダヤの民との関わりで祈ったように、われわれは次の様に祈ることができるだろう。「彼らの肉において、あなたを再び十字架にかけたわたしたちをお赦してください。わたしたちは自分が何をしたかわかっていなかったのです。」

キリストの物語をどのように提示するか、われわれはこれから先もずっと厳しく検討するよう求められている。キリストの物語はあらゆる民族に関連する物語である。しかしわれわれが他の民族の人間としての完全性にしっかりと関心を持ち、その完全性が攻撃されるさまざまな人々を憂慮しない限り、キリストの物語を命をもたらず真理として述べ伝えることはできない。人々への神の愛のメッセージを告知可能にするための前提条件のひとつは、伝えたいと思う相手の人としての繁栄を助けるのは何かについて思いやることであ

る。自分たちの生活のしかたの中にあって他者を傷つける可能性のあるものは何でも限りなく批判しなければならない。今日のグローバル化した経済システムのもつ隠れた暴力のために、世界の三分の二の人々は、ヨーロッパ連合（EU）の牛それぞれ一頭に与えられる補助金より少ない金額で生活している。このような状況は許容できないし、結託することもできない。本質的に伝道者である教会なら、すべての者を包み込む愛のメッセージを世界全体とともにわかちあえるよう、限りなく力をつくさなければならない。その召出しを全うするために、われわれの教会はこわれているものたちの場所に意識的に姿を現さなければならない。すなわち今日、人間性が十字架にかけられている場所である。

1996年に暗殺されたドミニコ会の〔アルジェリア・〕オラン司教ピエール・クラヴリはその死の一か月前に次のように書いている。「イエスは天と地に広がった状態で亡くなられた。その腕を広げ罪によって散り散りにされた神のこどもたちを集めようとする。彼らは罪によって隔てられ、孤立し、互いに反目し神御自身とも敵対する。イエスはこの罪によって生じた裂け目の線上に御自身を置いた。アルジェリアのわれわれはこうした世界中をめぐる大地震を起こしそうな断層構造線——イスラムと欧米世界、南と北、富める者と貧しい者——の上にいる。そしてわれわれはまさにここでわれわれの場所にいる。なぜならこの場所においてこそ、人は復活の光を垣間見ることができるからである。」これこそ癒しをもたらす福音に忠実であることである。癒しをもたらす福音は伝道者たちにこの世界のこわれているものすべてに関心向けさせる。自分たちとその世界で神の愛する人々に死をもたらすものは何に対しても限りなく批判させる場所、そのような場所に真にすることが伝道者たちの関心である。福音の失われた展望に代わることは決してなく、伝道者たちの正義、対話、創造された生き物の完全性への関心は、彼らの福音にかける情熱から直接に流れ出ている。神のあわれみを多少でもわかちあわないなら、われわれの言葉に癒やす力はない。

ブレンダン・ラヴェット師はこの30年フィリピンで神学を教えている。最近の著書『殺されるためではない竜』はクレアシャン・パブリケーションズ（フィリピン・ケソン市）発刊。